

「『不正な管理人』のたとえ」（ルカによる福音書一六章一〜二三節）

1 譬えとしての不正な管理人

ルカ一五章、一六章と、譬えによるイエスの教えがつづいています。「見失った羊の譬え」から、来週の「金持ちと貧しいラザロ」まで、含蓄の深い教えが、山脈（やまなみ）のように連なっています。

こうした中で、今日の箇所について、はじめに注意しておきたいのは、他の譬えがみな直接にはフアリサイ派や律法学者らに語られているのに対し、今日の譬えは「弟子たちに」語られていることです。

弟子たち、いまイエスと共に彼らもエルサレムに向かいつつあります。この弟子たちの信仰の成長もイエスの心から願いました。そのことはこれまで何度も明らかにされてきたことです。一番近いところでは、一四章の終わり（二五節以下）。十字架を背負ってイエスに従う、それが私の弟子である、そうした弟子の在り方が示されています。もう少し遡れば、主の祈りも、ルカでは、エルサレムへ向かう旅路の中で教えられたものでした（一一章）。今日の箇所も、弟子たちに対する、したがって教会に対する、私どもに対するイエスの教えなのです。

「不正な管理人」もイエスの弟子たちの「譬え」となる！ それはどうしてでしょうか。

教会も、私どもも、この世の只中に生きています。世の只中で信仰をもって神を見上げながら歩んでいます。信仰の場は、ここ、この世以外にはありません。それゆえの苦しみも喜びも私どもは経験します。そうした中で私どもはどのように生きるのでしょうか、それがイエスによって語り出されます。

今日の箇所、少し長いだけでなく、分かりにくいかも知れませんが、全体が二つに分けられると見ていただくと、つかみやよくなると思います。つまり、譬えの部分とその解説の部分です。

じつはその区切りが八節の真ん中にあります。一節から八節の前半まで、文言でいうと、「主人は、この不正な管理人の抜け目のないやり方をほめた」、ここまでが譬えそのものです。

そして八節の後半から、文言でいうと「この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている」、この言葉から、終わり（一三節）までがイエスの説明、解説になります。

さて譬えそのものをまず取り上げます。パレスチナの金持ちの地主の家で起こったことです。主人に代わってすべてを取り仕切っている管理人がいました。ある時この管理人について、「主人の財産を無駄使いしている」、つまり不正を働いていると告げ口をする人がいて、彼は主人に呼び出されます。

主人は彼を呼びつけて言った。「お前について聞いていることがあるが、どうなのか。会計の報告を出しなさい。もう管理を任せておくわけにはいかない」（二

節)。

この主人は、だれかの「告げ口」を聞いて、本当かどうか確かめもせず——そういうことはありうると思っていた？——、すぐに管理人を呼びつけ、解雇通告を言い渡します。この男の幸福な時間は終わりを告げようとしています。これからどうやって暮らしていけばよいのでしょうか。

管理人は考えた。「どうしようか。主人はわたしから管理の仕事を取り上げようとしている。土を掘る力もないし、物乞いをするのも恥ずかしい。そうだ。こうしよう。管理の仕事をやめさせられても、自分を家に迎えてくれるような者たちを作ればいいのだ」。そこで、管理人は主人に借りのある者を一人一人呼んでまず最初の人に・・・(三〜五節)。

これによると、解雇通告を受けて、彼には、弁明し、決定を覆そうとする意志など毛頭ありません。つまり、彼は、過去のことではなく、すでにひたすら将来へと目を向けています。

将来の基礎となるのは、現在です。彼には自分の現状もよく見えていました。肉体労働に耐えられるだけの力もない。物乞いするにはプライドが許さない。そして思いついたのは、主人に借りのある者から負債を減らしてあげ、恩を売っておくということでした。そうすれば、自分が管理人をやめさせられたとき、恩義を感じていたはずの彼らは、きつとお返ししてくれるだろう。家に招いてくれるかも知れない、いや必ずそうするだろう、と。

管理人は「一人一人を呼んで」(五節)とあります。お前だけにこうしてやろうとささやいたのでしょう。

負債を軽くしてやる。証書を書き換えさせる。すべては急いでなされなければなりません。しかし最後まで沈着冷静です。ここにも上げられた二人の負債者、一人は「油百バトス」を「五十バトス」に、一人は「小麦百コロス」を「八十コロス」に引き下げられます。それぞれ相当高額なようです。ただし免除の額としてはほぼ同じです。さらに負債者自身に書き換えさせていること、全額免除にできなかったことも彼なりの知恵が働いていることです。自分の将来——彼のしたことはすべてこの一点に集中していたのです。

もしこうした事件を私も見聞きしたら、率直に言って、ほとんどの人は、この管理人はうまいことやったと言いなながらも、やっぱり悪知恵に長けた悪人だと考えるのではないのでしょうか。ところが、まったくもって予想に反して、主人は彼を「ほめた」というのです。

2 時の間に

ここまでは、イエスの譬えです。この主人が「ほめた」ということまで、事実として起こったことなのです。

もし「ほめた」ということがなかったならば、この事件は、昔一人の悪賢い管理人がいたというだけに終わっていたはずです。主人が「ほめた」ことによって、この管理人は、弟子たちの在り方を指し示すものとして、イエスによって取り上げられることになったのです。イエスが取り上げたことによつて、この譬えの中の「主人」は神を暗示すると理解していいと思います。

なるほどこの「主人」は「ほめた」のですが、急いで言っておかなければならないことは、イエスは、ほめられた管理人の不正までも含めて承認しているわけではないということです。彼はどこまでも「この世の子ら」であつて決して「光の子ら」ではないのです。

さてこの管理人の何が、あるいはどこが、弟子の在り方を指し示す比喩ともなりうるものなのでしょうか。

一つは、先ほど、解雇通告を受けたこの管理人には、弁明し、主人の決定を覆そうとする意志などまったく見えないように見えるということを申しましたが、それと関連しています。

主人の言葉、「会計の報告を出さない。もう管理を任せておくわけにはいかない」というのは、まさに最後の解雇通告です。

しかしよく考えて見れば、会計報告を出すまでは、彼はその職にとどまっているということですから。むしろわずかな時間です。しかしこの「時の間」を彼はとらえ、無駄にしなかったのです。この少しの時、これをどう用いるか、それによつて自分の将来は決定されるのです。

ここに、弟子たちとの共通点があります。管理人が解雇通告を受けて、会計報告を出すまでの時間、これはまさに、私どもに置き換えれば、私どもの人生の時間そのもののことなのです。

管理人にとつてまことにわずかな時間、ほんの数日、私どもにとつては、数十年あるいは百年。しかしこの短さ長さは、神から見れば誤差の範囲です。管理人と同じく私どもの人生の時間も限られているのです。

重要なのは、この管理人が、この許された短い時間を、すべて自分の将来のために使おうとしたことです。

私どもも、この管理人と異ならないところにいます。神様からたくさんの賜物をあずかっています（ペトロ一、四・一〇参照）。それを生かし用い、将来へ向けて人生を方向づけることをすべきではないでしょうか。不正な管理人は、（不正はダメですが）、私どもに、神の恵みの管理者（スチュワード）としての私どもの在り方の比喩なのです。「この管理人（口語訳「家令」）は、昔から、英語では、スチュワードと訳されてきたところです。最近、マネージャーという訳が多いことに、少し驚いています」。

3 恵みの管理者として

もう一つ、弟子たちの学ぶべきことがあります。この不正な管理人の（賢い）と称

されたふるまいです。イエスは次のように言っています。

この世の子らは、自分の仲間に対して、光の子らよりも賢くふるまっている。そこで、わたしは言っておくが、不正にまみれた富で、友だちを作りなさい。そうしておけば、金がなくなつたとき、あなたがたを永遠の住まいに迎え入れてもらえる（八節後半〜九節）。

八節後半から、イエスご自身による譬えの説明です。今日はその最初のところ、八節後半から九節だけ取り上げます。

こうした言葉をもってイエスは、譬えの中の不正な管理人のふるまいを、評価したのです。

評価したのは、彼が、自分の自由になる「富」を用いて（それがたとえ「不正」なことであっても）「友だちを作」ろうとしたからです。それが、彼なりの将来への備えでした。私どもの将来は、しかしそれとは比較になりません。「友だち」ならぬ神によつて「永遠の住まいに迎え入れてもらえる」からです。

ところで「不正にまみれた富」というのは、難しい言葉です。富（お金）がいつも不正にまみれているとはいうことはできません。人間の用い方一つで、いかようにでもなります。不正にもなれば、正しいもの、大いなる助けにもなります。もしそれ自身、汚れているとすれば、信仰者はこの世の生活を営んでいくことはできないこととなります。

宗教改革者のルターは、「不正にまみれた富」について、私どもが、私どもに与えられている富を、他の人のために使わないときに、それは不正なものとなると書いています。

そうすると、あの管理人も、主人の財産を勝手に使っていたとき、自分のために使っていたわけですから、その富は、まさに不正なものでした。彼は、お金の奴隷として、富に支配され、富に奉仕していたのです。しかしこの人が借金を減らしてあげるために用いたとき、たとえそれが不正であっても彼は富を支配していたといつてよいのではないのでしょうか。

もちろん、話はそこまでで、この先、本当に負債者が、この管理人に恩義を感じて家に迎え入れてくれたのかどうか、語られてはいません。管理人が一部を免除してやったところまでしか書いてありません。

しかしそれもまた意味深いことです。というのも、管理人自身は「見返り」を強く期待していたわけですが、彼が本当に友だちとして迎え入れられたか、分らないことによつて、結果として、彼の与えたものは、見返りを求めないで与えたことになるからです。そこで私どもが思い起こしたい聖句は、これです。「あなたがたは敵を愛しなさい。人に善いことをし、何も当てにしないで貸しなさい。そうすれば、たくさんの報いがあり、いと高き方の子となる」（六・三五、一四・一四も参照）。私どもの信仰の場は「この世」以外にないと申しましたが、私ども「この世」にあつて互いの負債（罪）を許し合い、互いに与え合うことによつて「光の子」であることを証しつつ歩んでまいりましょう。

（二二年五月八日）